キャラクター名
×××竹生　竹照(タコウ　チクデ)

プレイヤー名

シンドローム	ブラックドッグ ブラックドッグ	ワークス	プログラマー	カヴァー	UGNエージェント
オプショナル		年齢	23	性別	男
覚醒	渇望	衝動	恐怖	初期侵食率	43 %
出自	[親の理解]母親　★D消去	経験	[死と再生]医者	邂逅	[母の味]七塚惣次

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	4	0	0			4
感覚	2	0	0		2	4
精神	2	0	0			2
社会	0	1	0		1	2

HP	30
行動値	8
(非装備時)	8
戦闘移動	13
全力移動	26

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃	14		ＲＣ			交渉		
回避			知覚			意志	2		調達		
運転：	2		芸術：			知識：	2		情報：ウェブ	2	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	2	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
インプラントミサイル	射撃	4r+11	---	12		対象：範囲(選択)　1ｼﾅﾘｵ1回使用可能　EA136
リニアキャノン	射撃	4r+12	---	8		対象ﾄﾞｯｼﾞ宣言時D-2　EA136

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
コネ：UGN幹部	
コネ：ハッカー	

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
No.05 実験体/ﾛｽﾄﾅﾝﾊﾞｰ	P 上級36	N		
[死と再生]医者	P　尊敬	N　不安		
[母の味]七塚惣次	P 好奇心	N　不安		
[シナリオ]ロップス	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:　4	残り財産P：　2

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
ハードワイヤード	2	---	常時	至近	自身	自動	---	
効果：専用ｱｲﾃﾑLV個選択常備化　侵蝕基本値+4								
ライトカスタム	1	---	常時	至近	自身	自動	---	
効果：「【肉体】【感覚】使用判定D+1」 3項目よりLV個選択、重複不可　侵蝕率影響無　侵蝕基本値+2								
オーバースロット	5	2	マイナー	至近	自身	自動	---	
効果：ﾒｲﾝﾌﾟﾛｾｽ中ATK+{LV*2}　命中D-3（≪ﾗｲﾄｶｽﾀﾑ≫取得時は命中修正無効）								
ｺﾝｾﾝﾄﾚｲﾄ<黒犬>	2	2	メジャー	---	---	---	---	
効果：<ｼﾝﾄﾞﾛｰﾑ>C値-LV(下限7)								
雷の残滓	3	2	メジャー	武器	---	対決	---	
効果：<射撃>射撃攻撃施行　命中時対象に邪毒(LV=ﾗﾝｸ)付与								
電子使い	1	---	メジャー	至近	自身	自動	---	
効果：電子記録媒体読取書込　EA43								
タッピング&オオンエア	1	1	メジャー	視界	効果	自動	---	
効果：無線電波傍受　情報送受信　EA43								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

【キーワード】
霞ヶ原支部／カフェ(本と雨宿り)　技術開発班班長(自称)　ロップス携帯化　七塚惣次(支部長)　七塚恋火(店長)
僕　オムライス　珈琲　雨が好き　知識はチカラ　引きこもり気味　運動は苦手
==========
ロップス「Pro.パン　オ疲レ様デス。」竹照「お疲れロップス。今日もよろしく。」

▼幼少期
共働きの両親。都会という荒波。守る為の箱(部屋)。
幼い頃から竹照の友人は、持ち運べる小さなノートPCだった。
両親からの愛は少なからずあったが、それ以上に竹照にとって、画面からの情報がアイだった。

ある日、留守番中の竹照の元に来訪者がやって来た。
窓から入ったそのジャームは、にこやかな笑みで竹照の首を折った。
眼前の悪意にすぐに対抗出来なかったのは、無知さゆえか無力さゆえか。
血液で満たされていく口の中で、ゴポゴポと声が泳ぐ。
 両親は悲しむだろうか　画面の向こうの友人は泣いてくれるだろうか
　両親がアイツに狙われたら？　画面の向こうの彼らが狙われたら？　そんなのは
扉へと向かうジャームに、伏した竹照の手が伸びた。行かせないという、声を届けるように。
その手から伸びた青い電流がジャームを灰色の砂にした頃、竹照の意識は闇に溶けた。

目が覚めると、そこは見知らぬベッドの上だった。
多数の機器に囲まれた竹照の意識は、それらを調べたいという欲求に柔らかく包まれていた。